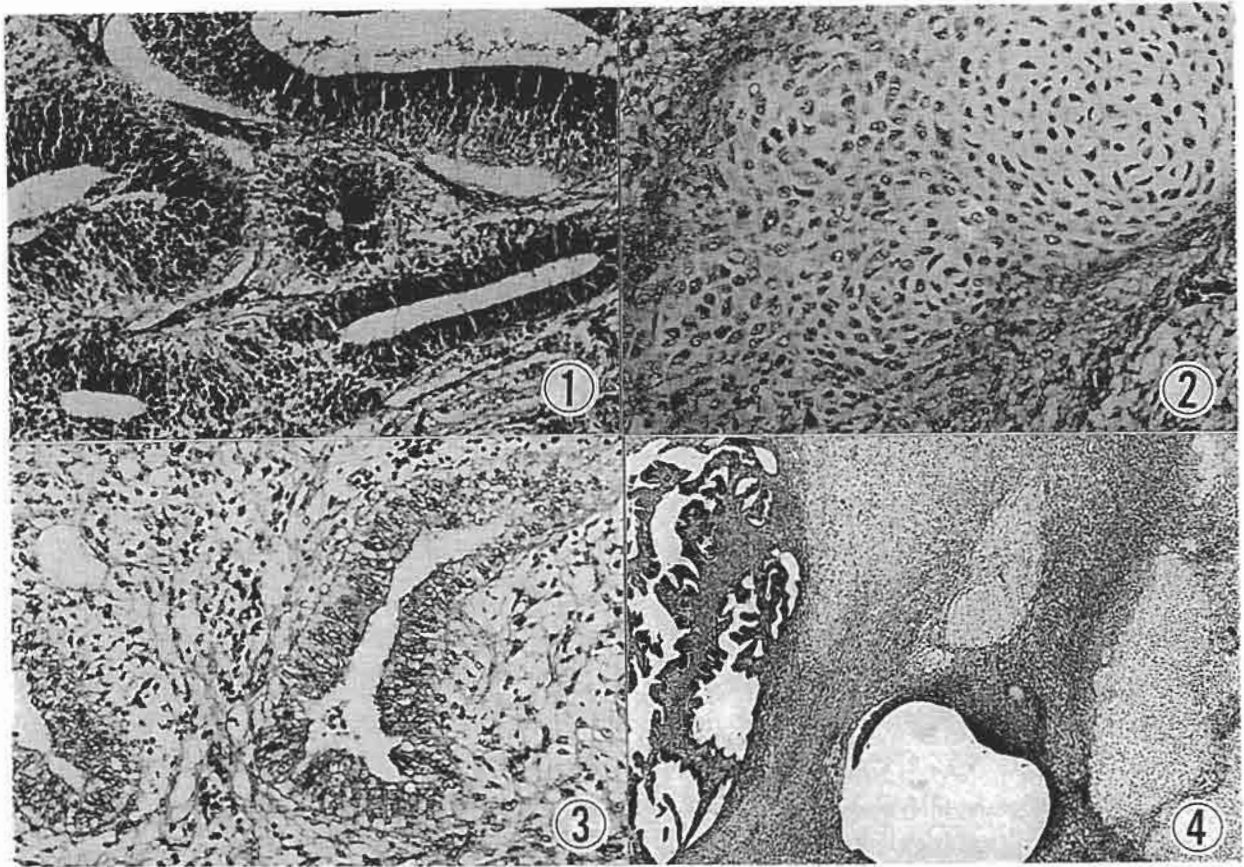


猫の腹腔内腫瘍

鹿児島大学農学部家畜病理学教室出題 第37回獣医病理学研修会標本No.701



動物：猫（アメリカンショートヘア）、雄、2歳齢。
臨床事項：過去の避妊手術の際、陰嚢内の精巣は一側のみであった。腹部が膨満したため開業獣医に上診し、試験開腹したところ、14×12×6cm（約600g）の限局性腫瘍が腹腔背側・腎臓尾方に認められたため、大網と共に摘出した。術後1カ月目の来院時における超音波診断では、直径約2cmほどの腫瘍が腹腔内に多数認められ、腹水が貯留していた。その1カ月後（術後2カ月後）に死亡したが、剖検は行えなかった。
肉眼所見：腫瘍断面はほぼ充実性で、白色部と褐色部が混在し、さらに大豆大から母指頭大の嚢胞が散在し、黒色水様液や褐色ゼリー状物が貯留していた。大網には大豆大の結節状腫瘍が数個認められた。
組織所見：腫瘍は多彩な細胞で構成される腫瘍組織と広範な壊死よりなり、由来臓器を推察できるような残存する正常組織は見られなかった。腫瘍組織には種々の程度に分化を示す3胚葉系統の胎児性組織が認められた。外胚葉性組織は小型の核を有する神経上皮由来腫瘍細胞が、神経管を思わせるように重層

に配列しながら増殖する管腔形成、さらにはロゼット形成が見られ、分裂像が多く、周囲の疎に増殖する未熟なグリア組織へと境界なく移行していた（写真1・H E染色）。中胚葉性組織は未熟な軟骨組織の散在、軟骨芽細胞及び線維芽細胞の腫瘍性増殖等が認められた（写真2・H E染色）。内胚葉性組織は立方状から円柱状の腺上皮由来腫瘍細胞が内張りする腺管構造が見られた（写真3・H E染色）。免疫染色では、神経管様構造がNSE、未熟なグリア組織がGFAP、中胚葉性組織がビメンチン、腺上皮がケラチン及びCEAの各々に対する抗体に陽性を示した。大網に認められた大豆大の転移性腫瘍は、著しく細胞密度が高い未分化な腫瘍細胞の増殖に加えて、腺上皮の管状あるいは乳頭状増殖及び未熟な軟骨組織が認められた（写真4・H E染色）。

診断名：未熟奇形腫。

考察：腫瘍は腹腔後方に位置した遊離腫瘍であり、過去の去勢手術の際に精巣が一側のみであったことから、停留精巣に発生した未熟奇形腫と推察した。